

## イスラエル留学体験記

嶋田 英晴

今回の留学で三度目のイスラエル滞在である。一度目は1992年夏、まだ東洋史学科にて「中世イスラーム圏のユダヤ教徒の歴史」について学び始めたばかりの学部生の頃に、研究の手掛かりを求めて、その頃『聖書』関連のゼミに出席させて頂いていた市川裕先生に頼み込んで、思い切って「日本聖書考古学発掘調査団」に飛び入り参加した時である。この折は、ガリラヤ湖南東のキブツ・アフィークで一週間程寝起きし、湖岸のエンゲヴ（遺跡）における発掘作業に従事した。そして、その後約二週間程イスラエル中を訪れて回った。一度目の滞在中で最も印象に残ったのは、ティベリアで見たマイモニデスの巨大な蒲鉾のようなお墓である。

二度目の滞在中は1997年夏で、西アジア歴史社会専門分野の修士課程在籍中に、プリンストン大学近東学科のM. R. Cohen教授から、休暇中にエルサレムで直接ゲニザ（後述）研究の手解きを受けるために再度イスラエルを訪れ、約一ヶ月半程逗留した時である。この折は、宿泊先である、エルサレム旧市街内のキリスト教系ホスピスから新市街（＝西エルサレム）にあるヘブライ大学ギヴァット・ラム・キャンパス内のユダヤ国立・大学図書館（JNUL）までほぼ毎日通い、終始缶詰になっていた。この時の滞在中は、何故か色々な人から出身国・名前とその意味を尋ねられて閉口した。そして、三度目が今回の留学である。

今回は、イスラエル政府奨学生として奨学金（授業料の一部と毎月の生活費）を支給され、「ヘブライ大学客員研究員」という資格での滞在中で、期間は2006年秋からの一学年である。留学の目的は、

- 1) 自分の専門に関する、現代ヘブライ語で書かれた学術文献を辞書を使って読める程度まで、語学力を強化すること。
- 2) 博士論文の主な対象である、中世（特に10世紀半ば～12世紀後半）のイラク・パレスティナ・エジプト・マグリブ・アンダルス・イエメンのユダヤ教徒についての研究論文及び史料（主にゲニザ文書の校訂版）を集中的に収集すること。
- 3) （可能であれば）ヘブライ語もしくは英語による、ゲニザ研究の講義を聴講すること、である。

今回、留学は、いかに強固な目的意識を持ち、それを持続させることが大切か、ということを感じさせられた。これから留学される方は肝に銘じて欲しい。

ここでやや長くなるが、ゲニザについて簡単に説明しておく。ゲニザ「גניזה」（Genizah）とは、ヘブライ文字の書かれた文書や儀礼用具のうち、既に使用されなくなったものを保管しておくためにシナゴークなどの建物に併設された保管所を指すヘブライ語である。中世のユダヤ社会では、ヘブライ文字で「神」

や神名の書かれた紙を破棄しないよう、使用済みの大量の紙がゲニザに貯えられて保存された。この中で、特に19世紀末にエジプトのフスタート（オールド・カイロ）のパレステイナ系ベン・エズラ・シナゴークのゲニザから発見された大量の文書が「カイロ・ゲニザ」と呼ばれ、通常「ゲニザ文書」と言えばこれを指す。

全体で25万枚以上にもなるゲニザ文書の原本は、現在イギリス、アメリカ、フランス、ハンガリー、ロシア、イスラエルなどを中心とする世界各地の19の図書館及び幾人かの個人によって分散して所有されているが、大半はケンブリッジ大学図書館及びオクスフォード大学のBodleian Libraryに所蔵されている。因みに前出のJNULでは、ほぼ全てのゲニザ文書がマイクロフィルム化されて自由に閲覧できるようになっている。

ゲニザに使用済みの紙を貯蔵する習慣は、エジプトでは19世紀に至るまで継続されてきたため、発見された文書の書かれた年代の幅は9世紀から19世紀までと広いが、その大部分は11世紀初めから13世紀半ばに集中している。そしてこれらの文書が書かれた場所は西はイベリア半島から東はインドにまで及ぶ。

25万枚余りの紙の内訳は、礼拝用の詩、宗教書の断片などに代表される文学的文書と、ユダヤ共同体の日常生活について書かれた記録文書に大別されるが、記録文書は全て合わせても2万枚余りである。記録文書の約半数は公私両面にわたる手紙、商業上の往復書簡であり、以下種々の契約書や婚姻・離婚証書、ラビ法廷の裁判記録、帳簿、計算書などと続く。

文学的文書の大部分がヘブライ語で書かれているのに対し、記録文書の大半はヘブライ文字表記の中世アラビア語で書かれている（Judaeo-Arabic）。ゲニザ文書は、中世ユダ

ヤ社会及びイスラーム世界、また当時の東西交易の様子を解明しようとする社会経済史の分野に大きく貢献する史料としても、今後の更なる研究の進展が待たれている。

ところでヘブライ大学では、夏にウルパンと呼ばれる現代ヘブライ語速習用集中講義があり、2006年度の場合、3ヶ月コースは7月初旬から、2ヶ月コースは8月初めから授業が開始された。しかし、2006年には市川裕先生を企画者として、5月25日から7月23日まで駒場博物館で「聖書に生きる・トーラーの成立からユダヤ教へ」という展覧会が催され、その準備及び期間中に開催されたシンポジウム等に年初から参加させて頂いたこともあり、夏のウルパンの3ヶ月コースへの参加は当初（＝イスラエル政府奨学金を支給されることが正式に決定した4月後半）から断念していた。尤も、8月からの2ヶ月コースにも当初から参加するつもりは全く無く、イスラエルへの渡航はあくまでも秋と心に決めていた。結果的に7月から8月半ばにかけてイスラエルとレバノンの民兵組織ヒズボラーの間で激化した戦闘状態に一切巻き込まれずに済んだ。尤も、後ほど現地で聞いたのだが、エルサレムは戦闘中も至って平穏だったそうである。

さて、イスラエルへの渡航後は、留学目的に基づく研究計画に従って、週の内4日は大学でのヘブライ語の授業に出席し、残りの3日を授業の予習・復習及び自分の研究に充てることの繰り返しであった。しかし、今から考えてもほぼ毎日不可思議な体験をしたので、以下それらの中から二つのエピソードを紹介することとしたい。

イスラエル政府奨学金の申請手続きをし

ていた2006年の1月、募集要項によれば、客員研究員としてヘブライ大学に留学するためには現地で指導教官となってくれる先生を予め決めておかなければならない、とのことだった。そこで、2005年の12月に東大でゲニザ研究や死海文書について非常に興味深い講演をされた、シカゴ大学のNorman Golb教授に連絡を取り、先生の知人でヘブライ大学にてゲニザ研究に携わっている学者について問い合わせたところ、Menahem Ben-Sasson教授を紹介して下さった。Ben-Sasson教授はゲニザ研究における世界的権威の一人であり、彼の論文は幾つか内容を把握していた。従ってかなり気後れしたが、東方（この場合はアジア・アフリカを指す）出身のユダヤ教徒研究のイスラエルにおける「メッカ」（この場合単に牙城と言うべきか）であるBen-Zvi Instituteの所長もその年から彼が兼ねることになっていたもので、思い切って連絡を取り、何度もメールの遣り取りを経た後、晴れて奨学金が取れた暁には指導教官になってくれる、という言葉を取る事が出来た。ところが、いざイスラエルに渡航して彼と接触を取ろうと試みたところ、何と彼は2006年4月の総選挙で与党「קדימה」（Kadimah「前進」の意）から出馬して当選し、国会議員になってしまっていた。しかも、「議員としての仕事に忙殺されて大学には月に一度しか顔を出さず、従って授業も一切受け持っていない」とのことだった。そこでお会いするのを丁重にお断りして、誰か別の研究者を紹介してくれるよう依頼したところ、「とにかく会いに来なさい」とのことだったので彼の秘書と携帯電話で何度もスケジュールを調整して面会日を決めた。すると何故か翌日のヘブライ語の授業で、先生から「オルメルト首相と会いたいかな、ハル（私の海外での愛称）はどうだ？」としつこく問われた。ところが、面会日の前日、新学

期以来意気込んで勉強してきた疲れが一気に出たため、休憩のためパソコンで日本製のアニメを何時間も観ていたところ、件の秘書から「明日のBen-Sasson教授との面会はキャンセルする」と一方的に通告された。その後、後悔してその日はずっと勉強した。数日後、気を取り直して再び秘書とスケジュールを調整してBen-Sasson教授との面会日を決めた。すると、翌日のヘブライ語の授業で再び先生から「オルメルト首相と会いたいかな、ハルはどうだ？」としつこく問われた。前回と同じく「いいえ！」と答えた。勿論今回は、面会日の前日も含めて油断することなく一心不乱に勉強した。そのせいか（？）、Ben-Sasson教授との面会はほぼ無事行われ、彼が直接指導出来ないこと、及び授業が無いことの埋め合わせに、Miriam Frenkel博士を紹介して下さると共に、数日後に前出のM. R. Cohen教授がギヴァット・ラム・キャンパスでゲニザに関する講演を連続で行う旨を教えてくれ、詳細について私のPCにメール送信してくれた。ただ、その際、私のメールアドレスの@より左部分である「dearyhwh」にかなり不満を抱いていたようだ。その証拠に、私のメールアドレスを確認した際、「d-e-a-r」の部分を一文字ずつ私にゆっくり発音させた後、「Dear（親愛なる）だな？」と確認した上で、次のテトラグラマトン（ユダヤ・キリスト教の神の名であるYHWH「ヘブライ語でיהוה」）を私が発音するかどうかが試していた。結果的に無難に「y-h-w-h」と一文字ずつ答えておいたが、この対応は正解だった。ユダヤ教では、神の名を唱えることは固く禁じられているからである。彼は、世俗的な人間が大半を占めるイスラエルにあつて、「דתי」（dati＝ユダヤ教の敬虔な信仰者）だった。その証拠に彼の頭にはキツパ（ユダヤ教において、神への敬虔さを示す鍔無し帽）が乗っていた。因みに、

私のこのメールアドレスは、ユダヤ神秘主義カバラーの実践的な手法に基づいて作られている。即ち私の名前である「英晴(ひではる)」は、ヘブライ文字で「היהורו」と書くが、これを並べ替え「הויהוה」としたものを、英語のアルファベットに転写したものである。しかし、このままでは文字通り「Dr.YHWH (=ヤハヴェ博士)」となってしまう、流石に烏滸がましいので、ヘブライ語表記では省略される母音を補って「DearYHWH」にしていたのである。Ben-Sasson教授との面会は、非常にスリリングな体験であった。

もう一つのエピソードは、眠っている間に見る「夢」と深く関わるものである。イスラエルでは、よく不思議な夢を見た。その中の一つをここに紹介する。

留学生活も半年近くなった2007年3月末のある日のことである。その日は勉強に疲れたので、夕方からユーチューブでGlenn Gouldの指揮によるJ. S. バッハの『カンタータ54番』のARIA「いざ、罪に抗すべし」と、『カンタータ208番』のARIA「羊は安らかに草を食み」のピアノ用編曲を何度も繰り返して聴いている内に深夜になってしまった。まるで天国にいるような感じがした。しかし、あまりに音楽に陶酔して興奮したためか、朝7時まで一睡も出来ず、わずか一時間弱ほど寝ただけで目が覚めてしまった。ところが、目が覚めるまで見ていた二つの夢の一つ目は、何故か地球を脱出しようとするユダヤ人達の乗った宇宙船が発射する際、私一人が管制室でそれを見送るというものだった。本当は彼らと一緒に旅立ちたかったのだが、発射の際にどうしても外部(=管制室)から発射装置を操作する人間が必要だったのである。しかも、そのことを宇宙船に乗っているユダヤ人達は知らないのである。その時、幼稚園の園児だ

ったころ好んで読んだ浜田廣介の童話『泣いた赤鬼』やOscar Wildeの童話『幸福な王子』が頭を過ぎった。次の夢は、妻を娶らずに子供(恐らくは男の子)を誕生させる(多分試験管ベイビー)というものだった。あまりの我が子愛おしさに、「この子は奇跡の子だ！」と叫ぶと、側にいた両親、特に母の表情が何故か陰った。それでも子供を授かるとはあんなにも幸せなものなのかと、喜びのあまり目覚めた時は涙で一杯だった。そして、その日の授業で先生に夢のことについて話そうと思って、『現代ヘブライ語辞典』(キリスト聖書塾)で「夢を見る」という単語の完了形である「חלם」(halam)を予め調べておいた。

その後何もする気がせず、しかも若干対人恐怖症気味のまま大学のヘブライ語の授業に行くと、先生が「今日は何か特別なことはあるか？」と訊くので、朝見た二つ目の夢の話をしたら、「メシアがどうのこうの」といっているので詳しく訊くと、「メシアもそうやって生まれて来る」とのことだった。しかも、その日の授業のテーマは、テキスト92ページの「メシアがエルサレムに来る」であった。2月から始まった春学期のヘブライ語クラスの先生は、何故かテキストを順番通りに用いず、いつどの部分を勉強するか全く分からない状態だったが、恐らくはその日のテーマを盛り上げるために私の夢の内容を利用したのだろう。その後2時間たっぷりユダヤ教、キリスト教、イスラームのメシア(イスラームに関してはマフディー)について授業に参加している皆で語り合った。授業が終わって帰宅後、イスラエルで大の親友になった、ヘブライ大学留学中の日本人である山城貢司氏に、その日のことをメールで伝えようと文章を書いていたところ、訳も無く至福感に襲われて涙が後から後から止め処なく溢れて来た。その時、学生寮のルームメイトの一人である「פז」

(Paz=「純金」の意)がいつものように私のパソコンを借りに来た。そして、私の頬に涙が流れているのを見ると、何故か私の『現代ヘブライ語辞典』を「見せてくれ」と言うので貸すと、158ページの一つのヘブライ語の単語を指した。それは「חללית」(halalit「宇宙船」)であった。しかも、それは「חלום」(halam「夢を見る」)のすぐ上にあった。パズは静かに微笑んでいた。涙が止まらなかった。

心理学における第三の勢力、「人間性心理学」(Humanistic Psychology)を代表する一人であり、現役の臨床心理学者にしてニューヨークのイェシヴァー大学で教鞭も執っておられるEdward Hoffman博士は、その著書『カバラー心理学・ユダヤ教神秘主義入門』(原題 *The Way of Splendor : Jewish Mysticism and Modern Psychology*)の中で次のように述べている。

宇宙に関する我々自身の理解が深まるにつれて、外面的な出来事の裏に隠れているパターンを、もっと容易に読み取れるようになる。一見何の関連もなさそうな出来事どうしをつないでいる共通の糸が見えてくるのだ。以前には単なる混乱や災難(シェークスピアのハムレットが「残酷な運命の石つぶてや矢弾の雨」と嘆いたもの)としか見えていなかったのに、やがて、ある統一性に気づくようになる。(中略)もちろん、年がら年じゅう日々の出来事を微に入り細にわたって吟味してなどいられない。しかし、カバリストが常に主張してきたのは、一見でたらめにおきているかのように見える事象の裏側に、実は綿密に編まれた意味のパターンが隠れているということだ。知恵を働かせることでそれを見抜く才が生まれると言われ、その力は単

なる超感覚的能力よりも高く評価される。

彼のこの文章を読んで、仏教の根本思想である「縁起」を思い起した。それと、最近、「愛するのはユダヤ人だけで本当にいいのか?」と問われる夢をよく見るようになった。